日本語教育におけるマルチメディア活用の 有効性と教師の役割

鄭 起 永

キーワード：日本語教育，マルチメディア，有効性，教師の役割，CALL

1. はじめに

今まで、韓国における日本語教育の内容はどちらかと言えば文学あるいは言語学的事実に関するものが主であった。しかし、最近の日本文化開放や活発な交流に伴い、文学または文法中心の教育より、発話中心のコミュニケーション能力養成教育への要求が高まっている。その面で韓国における日本語教育もその有り方や方法を模索する時期に来ているのではないか。つまり、日本語使用の機会の少ない学習者にどのような教材や補助道具を用い、どのような方法で教育していくべきか。特に、今までの記号としての言語教育だけではなく、言葉の裏にある日本の文化・歴史、また日本事情をどう捉えて、どう教えるかという問題、異文化間コミュニケーションや両国間に見える非言語行動の相違の教育をどういう手段と方法で教えるかなどの課題が残されていると思われる。

その意味で最近注目を集めているマルチメディアは、外国語学習・教育において、従来のテキスト中心の教材やオーディオ・ビデオ教材が達成できなかった言語的・視覚的・聴覚的・触覚的な機能を刺激する音声・動画・文字・絵などをランダムにアクセスしながらコンピュータと相互作用することで発話能力を向上させるのみならず、文字や語彙の学習だけでは理解できなかった社会言語学的な情報まで学習者に伝えることができるので、今後画期的な学習効果をもたらすものと期待されている。しかし、マルチメディアを日本語教育に利用する前に、どういう面で有効であるか、どのように使えばいいのか、またさらに、教師はどのような働きをすればより教育効果が上がるのかなどについて、もう少し明らかにして置く必要があるのではなからうか。

したがって、本稿では日本語教育においてマルチメディアがどういう面で有効であるか、その利点と弱点を整理し、またさらにそれに伴う望ましい教師の役割についても考察を行いたい。

2. マルチメディア活用の意義と必要性

日本語教育にマルチメディアを導入する意義と必要性について整理すると、次の4つにまとめることができるであろう⁽¹⁾。

(1) コミュニケーション能力の養成

それではなぜマルチメディア活用の語学教育をおこなう必要があるのでしょうか。これを塩見邦雄(1996)の視聴覚教育の理論に基づいて説明すると、どのような教育であっても、単なる講義や説明、教師について練習するだけでは、学習者の関心を引きつけることは難しく、モチベーションを引き起こすこともできない。なかなか学習者の頭に、教えたいことが入っていかないという悩みがある。デューイ(Dewey, J.)は、経験こそが、教育であると述べているが、このことは、学習者は自分で経験して学習していかなければならないということであろう。テキストと教師中心の教育だけでは、学習者には浅いレベルの経験にしかならない。学習者は、教えられるものを、少なくとも自分の経験のレベルに持っていく必要がある。その意味では、なにかの形に還元したり具体的なレベルに落したりして経験させる必要があり、マルチメディアはそれに近い状況を作り出して練習ができるので、最近の語学教育で重視しているコミュニケーション能力の養成のための適切な道具になりえると思われる。つまり、日本語教育現場におけるCD-ROMとインターネット、電子メールなどのマルチメディア資料の使用は母語話者教師に代わって、学習者のコミュニケーション能力を伸ばしてくれるはずである。

(2) 異文化の理解

最近韓国では、今までの言語構造中心の日本語教育に対する反省から、ことばに内在されている文化をいかに教えるか、また日本文化の理解と生活様式をいかに教えていくかが一つの課題になっている。つまり、どのような内容の教材を用いて、どのような方法で教えるかが問われているのであるが、加藤清方(1996)の「日本語が学問や教養のために学ばれるのではなく、実際に日本人とコミュニケーションを行うために学習されるようになると、単なることばの習得だけではなく、ことばが伝える文化的な意味などの修得も必要になる。言い換えれば、ことばを介して文化を構造化することにより、日本人の物の見方・考え方、行動の仕方、価値観、規範、行動基準などについての理解を深める。このような文化の貯蔵庫として、マルチメディアはすぐれている」という指摘はその教育手段を考える上で、示唆されるところが大きい。

日本語学習、特に外国における日本語学習の場合、広範な社会文化的状況を理解するのに、言葉のみによる説明には限界がある。擬似的・間接的にせよ背景文化の理解が重要であり、それを体験するために、マルチメディアが必要なのである。人が使用する言語を社会とのかかわりから見るのが社会言語学という視点だとすれば、マルチメディアを利用した日本語教育は言語学的事実の研究と教育が中心であった韓国の日本語教育界に、学習者のための心理的事実と社会的事実の教育に役立つものと思われる。

(3) 学習者主体の教育

コンピュータを利用した日本語教育は、それまで難点とされていた時間と空間の制約を乗り越え、また多様な機能を持った学習メディアを提供することによって、韓国の日本語教育現場の問題点として指摘されている教師の一方的詰め込み式教育、過密学級、情報活用の制限性等の問題点を改善する方向へ進むだろう。即ち、マルチメディアとインターネットを利用した日本語教育は、文字・音声・画像といった形式の異なる情報を一元的に管理でき、かつ、学習者の個別の要求にしたがって情報を

双方向に流通させることができる学習者主体の教育を実現するものと思われる。

(4) 日本語教育へのコンピュータ導入

21世紀は情報化の時代といわれている。このような情報化時代に社会が要求する人材は、世界のコンピュータ網の数多くの情報の中で自分が必要とする情報を検索し、その情報を自分のコンピュータへ持ち込んで適切に処理できる人であろう。このような未来指向型の人材を育成するためには、情報化時代をつなぐ中心軸であるコンピュータの効果的な活用は不可欠な要素である。その意味で、外国語教育にコンピュータを導入することは、情報化・国際化の社会において、外国語能力とコンピュータ・マインドを同時に育てられるということで意義あることではなからうか。

以上、日本語教育におけるマルチメディアの導入は、学習者による情報の発信と創造的な活動を支援するためであり、教師の代わりをつとめるティーチングマシンを用意することではない。「考えるための教育」「自己を表現するための教育」へとステップを踏み出すことにその意義があると考えたい。

3. マルチメディア活用の有効性

語学教育においてどうしてマルチメディア活用が有効であるのか、他のメディアからは見えない、その利点と弱点について今まで明らかになっている内容を整理すると、次のように大きく3つに分けることができる⁽²⁾。

3.1. 日本語教育におけるマルチメディア活用の利点

(1) 動機付け

文字、音声、グラフィックス、アニメーション、動画などを統合的にも個別的にも活用できるマルチメディアは、既存の文字と文法中心の単調で飽きっぽい教育から脱皮して、立体的な学習を可能にした。シミュレーションやゲームなどを通して、学習者の心により強いインパクトを与え、視覚・聴覚・触覚といった人間の感性に訴えることで、創造的・積極的な学習が期待できるのである。その意味で、マルチメディアは学習者の学習意欲をかき立て、動機づけを高めるのに最も有効なメディアだと言えるであろう。

(2) 相互作用と記憶の定着

相互作用学習

コンピュータによるマルチメディア日本語学習では、学習者が常にコンピュータと相互作用をしながら学習を行うことができる。コンピュータは学習者の応答に対して即時フィードバックすることによって誤謬の指導がその場で行われる。また、学習者の応答や学習者の学習過程(学習した日付や時間、成績など)、学習結果などを記録し、分析ができる。つまり、コンピュータと相互作用で学業達成度を直ちに把握でき、評価資料、誤謬資料の体系的な分析が可能なのである。その他に学習者対教師、学習者同士のインターアクションを促進することができる。

記憶の定着と活性化

認知心理学では複数の感覚を通して得られた記憶のほうが定着率が高い事が明らかにされている。Heinich他3人(1998)⁽³⁾によると、人間が情報を獲得し記憶するのは、直接経験したものは90%、目で見て聞いたものは50%、見ただけでは30%、聞いただけでは20%、読んだのは10%であるという。このような観点から見ると最近のコンピュータとマルチメディアの結合は言語学習において従来のテスト中心の教材やオーディオ・ビデオ教材が成し遂げられなかった、間接体験による言語的・視覚的・聴覚的な機能など、複数の感覚に訴えるため、記憶の定着率が高いと言える⁽⁴⁾。

ランダムアクセスと無限の反復練習

語学教育で欠かせないのが学習した内容の定着のための反復練習である。その意味で、マルチメディアは従来の視聴覚教材と違い、音声・動画・文字情報のランダムアクセスと無限の反復練習が容易にできるので、語学教育では大変有効な教材なのである。

(3) 個別化教育

学習の個別化により、学習の最適化、効率化

学習の個別化とは、各個人の能力水準と学習進度を考慮し、学習者個々のニーズに合った学習のことである。発音、語彙、文法、意味、状況など言語の多次元的要素を分析し、総合的に指導しなければならぬ言語教育においては個別化された学習は、学習能力や学習進度、学習目標、学習方法の異なる学習者が混在している場合でも授業が構築できるので効果的である。コンピュータのマルチメディア教育システムを活用することで、学習者は自分で学習を選択でき、教師は学習の最適化と効率化を図ることができる。この学習の個別化は、既存の集団的一斉教育では不可能であったが、コンピュータによって可能になったのである。

遠隔教育

コンピュータ・ネットワークやインターネットの利用は、時間と空間の制約を乗り越え、遠隔教育を実現した。これにより、より多くの学習機会が提供されるのみならず、学習終了後のアフターケアや自律学習もが可能になったのである。

学習者の情意性

マルチメディアシステムによる学習の個別化は、より自然な状況で語学学習ができる環境を作り出せるので、既存の教室授業に見られる精神的な圧迫感を解消し、学習者を情意的に安心させ、気楽に学習に没頭できるようにする。

以上の他にも、コンピュータの日本語教育への活用は、インターネット等による発見学習や課題解決学習に効果があると言われている。

3.2. 日本語教育におけるマルチメディア活用の弱点

(1) 機械的な学習

マルチメディアを活用した語学学習の最大の弱点は、コンピュータという機械の属性上、創造的な意思疎通が不可能であるという点である。つまり、いくら実際の状況に近いプログラムと言っても結

局コンピュータと人間の間の対話であって、この時のコミュニケーションはシミュレーションに過ぎない。現在のマルチメディア教材は主に機械的な学習のものが多いために、学習者が一通り学習した後はすぐ飽きてしまう場合が多い。

(2) 実質的な教育成果の問題

実際状況における対応能力の不足

マルチメディア日本語学習プログラムは、実際の会話が行われる状況の1つまたは2つのパターンを提供するのみで、日常生活で発生可能な多くの場面に対する対応能力を養うことや経験による実用的な表現学習が現実的に難しい。決まった状況下の質問に対して、固定された答えを提供するのみで、その相互作用も融通性に欠ける場合が多く、実際のコミュニケーション場面における対応能力が不足していると言える。

実質的な教育効果に対する疑問

マルチメディアによる語学学習では、コンピュータがすべての事をやってくれるという漠然な期待から、かえって受動的な学習になりやすい。また、発音、語彙、文型練習、聴解、読解などの理解領域は効果的に学習できるが、会話と作文などの表現領域は学習しにくいのが実情である。しかも、教育効果は、メディアよりも教授法とか教師や学習者など、その他の要素による場合が多いので、実質的な教育効果の側面から見た時、期待するほどの効果を望めなかったり、実際の教育成果を図りにくい点がある。

(3) コンピュータ運用能力と交換性

コンピュータ運用能力

キーボードなどコンピュータに慣れていないと誤答をする場合がある。つまり、コンピューター運用方法をきちんと分からなければ、能率的な学習が出来ない。多くの学習者と教師はコンピュータに対して拒否反応を持っていたり、コンピュータを恐れている場合が多い。

授業準備と相互作用の負担

マルチメディアを授業で活用する時、新しい教授法の研究と設備の問題など教師の準備が多いので教師の負担が増える。また、学習者の場合も絶えずコンピュータと相互作用をしなければならないので、心理的な負担から拒否感をあたえやすい。

高費用と交換性の問題

CALL⁽⁵⁾プログラムを効率的に実行するためには施設の面で、高い費用の問題がある。また、ソフトウェアとコンピュータ間の交換性の問題を解決するためには多くの費用と時間が所要される。

4. 教師の役割

マルチメディア語学学習システムの出現により、学習者それぞれがコンピュータを用いて、各々の興味とニーズに応じた個人カリキュラムで自学自習と個別学習を進めていけば、教師は不要になるのではないかという憂いの声がある。つまり、従来の教師の役割をすべてコンピュータがとって代わり、人間教師はその脇役へと転落してしまうのではないかという心配である。しかし、もともとコンピュー

タは教えるのがあまり得意ではない。それがマルチメディア化したところでその特性は変わるはずがない。実際には、教師の役割がますます重要になるのである。

しかし、コンピュータを中心に学習が進められていくうえで、教師が従来とは違った関わりりをしていかなければならないのも確かであろう。前述したように、日本語教育におけるマルチメディア活用にはそれぞれ利点と弱点があるので、その問題点を防ぎ、教育効果を上げるためには教師の役割が大変重要である。以下、マルチメディアシステムを利用した日本語教育において教師はどのような働きをすれば良いのかその役割についてまとめる⁽⁶⁾。

4.1. 学習の支援者

学習支援者は、学習者個人の学力・興味に応じた授業を行うための準備をする役割である。「授業準備」と「教材準備」がある。

授業準備

学習者のレディネスとニーズの分析を通して学習状況をチェックし、事前指導、実際の授業活動、事後活動を計画し、授業展開を綿密に考える。また、学習者に対する動機付けを行う。

教材準備

学習者個々のニーズを満たすコースウェアを準備する。市販のものを選ぶか、必要によっては直接教材をつくる。なお、ソフトウェアについての前もった研究と理解が必要である。

4.2. 学習ガイド

効果的な授業を行うために、授業目標と学習方法、教材の利用法などを学習者に詳しく教える。

4.3. 学習のオーガナイザー

学習のオーガナイザーは、学習の主催者・運営者としての役割である。

コンピュータと教師の役割分担の明確化

コンピュータが学習を担う部分と、人間教師の果たす役割を明確に分担する必要がある。語学学習過程のミニマル・ペアやパタン・プラクティス等の機械的な記憶に頼る部分はすべて機械に任せておいて、人間教師の方は、例えば作文の正誤判定やインターアクションを要求する作業のような、人間でなければできない仕事に力を注ぐことが要求される。

学習状況のコントロール

教師と学習者あるいは学習者同士が適切な方法で相互作用できているか、学習内容を理解しているか、また学習者がどれだけ正確に、しかも流暢に日本語を聞き、話し、読み、書くかを評価するなどの学習状況をコントロールする。さらに、それぞれ異なる反応を示す学習者が最適に学習できるようにその行動をコントロールする。

4.4. 学習のパートナー

創造的な授業を実現するために、学習者と相互作用を行い、ともに考える相手となる。

4.5. 学習のアドバイザー

学習者が作業中でも、机間巡視をしながら、学習者それぞれが抱えている問題の解決を助けるために適宜アドバイスを与える。具体的には、コンピュータの使い方をはじめ、学習者が教材を使用し、それを発展させる際にどういう形で、どういう道筋で行っていけば効果的に学習ができるか援助する役割、学習者の相談相手、もしくは友達になる。

5. まとめ

以上、マルチメディアを活用した日本語教育における教師の役割を考察してみた。ここでまず考えられるのは、コンピュータとて所詮機械であり、その能力には限界のあるということである。コンピュータの語学教育への活用は、ロボットと人間の関係のように、高度な人間的判断を伴う語学教師の仕事を完全に代行することはできない。現時点において、コンピュータは人間のように臨機応変に新しい状況に対応していくような能力がない。コンピュータはあくまでも教師の能力の一部を補う補助的道具として、また日本語教師が教育の質や効率を高めるために利用する道具として捉えるべきであろう。

そして、教師がいかにコンピュータを活用し、どういった目的でコンピュータを利用していくのか、つまり、「なにができるか」ではなく「なにがしたいか」という主体的な姿勢がなければ、結局は道具を使うどころか、道具に使われてしまう結果にもなりかねない。要は、学習にとって最大の学習成果が挙げられるよう、教師はあらゆる手段を尽くして努力を重ねて行かねばならず、教師の能力を補う究極的な方策としてコンピュータの利用が提唱されているのである。

しかし、最近のCALLプログラムには、人間教師の補助的手段の域を越えて、教師の代わりに努める目的のものも多く出現している。このような状況で教師は、前述した幾つかの役割パターンを基準に、従来の授業と平行させながら学習者の疑問や問題点を解決したり、質問などの学習者とのインターアクションに答える役割を担って行くのが望ましいと思われる。

結局、教師の役割は、学習者と教材、インターネット、コンピュータとの間に立つこと、つまりインターフェイスとなることが、マルチメディア化した日本語教育における教師の役割ではないだろうか。

付記：この論文は、2001年度釜山外国語大学校学術研究助成費によって行われた研究である。

注

- (1) 詳しくは加藤清方(1996)「マルチメディアを利用した日本語教育のあり方」『日本語学』2. 明治書院のpp76と塩見邦雄(1996)『視聴覚教育の理論と方法』ナカニシヤ出版のpp7 - 26を参照されたい。
- (2) この有効性については、北尾謙治(1993)『コンピュータ利用の外国語教育 - CAI動向と実践 - 』英潮社pp5と国立国語研究所(1995)『日本語教育指導参考書21 視聴覚教育の基礎』pp11 - 12, 塩見邦雄(1996)「視聴覚教育の理論と方法」ナカニシヤ出版pp10 - 12, 清水正三朗・小島明(1995)『教育とメディア』教育史料出版会pp91, 中川良雄(1994)「日本語学習支援システムとしてのCAI」京都外国語大学日本語学科『無差』創刊号pp64 - 64, 中川良雄(1994)「CAI : 日本語教育のニューメディア - コンピュータを用いた日本語学習の展開 - 』『竜谷大学国際センター研究年報』第3号pp43 - 45などの資料を参考し、筆者が再整理したものである。
- (3) Heinich,R., Molenda,M., Russell,J. and Smaldino, S.(1998) . Intructional Media and Tecknologies for learning. Englewood Cliffs , NJL prentice - Hall Inc.
- (4) 日本語教育におけるマルチメディア活用の有効性検証の実験例については、加藤清方(1996)「マルチメディアを利用した日本語教育のあり方」『日本語学』2. 明治書院pp80 - 81を参照されたい。
- (5) CALL(Computer - Assited Language Learning) : コンピュータ支援言語学習
- (6) マルチメディアシステムを利用した語学教育における教師の役割については、北尾謙治(1993)『コンピュータ利用の外国語教育 - CAI動向と実践 - 』英潮社p8, 沢田肇(1998)「CALLにおける教師の役割 - 協同アプローチのなかでの授業形態が要求するものとは - 』『マルチメディアと外国語教育 - 講演・討論会報告書 - 』広島大学留学生センター pp20 - 23, 菅原安彦(1997)「語学教育のマルチメディア化への提言」『国士館大学教養論集第45号』pp12 - 14, 中川良雄(1994)「CAI : 日本語教育のニューメディア - コンピュータを用いた日本語学習の展開 - 』『竜谷大学国際センター研究年報』第3号pp45 - 46などの資料を参考して整理した。

参考文献

- 加藤清方 (1996)「マルチメディアを利用した日本語教育のあり方」『日本語学』2 明治書院
- 加藤清方(1999)『視聴覚メディアと日本語教育』, NAFL Institute 日本語教師養成通信講座20 アルク
- 北尾謙治(1993)『コンピュータ利用の外国語教育 - CAI動向と実践 - 』 東京 : 英潮社
- 国立国語研究所(1995)『日本語教育指導参考書21 視聴覚教育の基礎』
- 塩見邦雄(1996)『視聴覚教育の理論と方法』ナカニシヤ出版
- 清水正三朗・小島明(1995)『教育とメディア』教育史料出版会
- 菅原安彦(1997)「語学教育のマルチメディア化への提言」. 『国士館大学教養論集第45号』国士館大学教養学会
- 中川良雄(1994)「日本語学習支援システムとしてのCAI」『無差』創刊号 京都外国語大学日本語学科
- 中川良雄(1994)「CAI : 日本語教育のニューメディア - コンピュータを用いた日本語学習の展開 - 』『竜谷大学国際センター研究年報』第3号
- 広島大学留学生センター(1998)『マルチメディアと外国語教育 - 講演・討論会報告書 - 』広島大学留学生センター

- Heinich,R., Molenda,M., Russell,J. and Smaldino , S.(1998) . *Intructional Media and Tecknologies for learning*. Englewood Cliffs ,NJL prentice - Hall Inc.
- 李徳奉 (1998) 「マルチメディア言語学習の学習心理」 『Multimedia - Assisted Language Learning』 創刊号 Vol.1, No.1. KAMALL. 韓国マルチメディア言語教育学会 .
- 鄭起永 (1997) 「韓国における日本語教育の方向性 - マルチメディアをめぐって - 」 『柏原司郎先生定年記念語文学論叢』 ソウル：宝庫社 .
- 鄭起永 , 河恩愛 (1998) 「マルチメディア日本語学習用プログラム内容分析」 『Multimedia - Assisted Language Learning』 創刊号 Vol . 1 , No . 1 . KAMALL . 韓国マルチメディア言語教育学会
- 鄭起永 (1999a) 「外国語授業における効率的なCD - ROM活用方案」 『1998 GLE 公募課題 研究報告書』釜山外国語大学校 国際通商地域院
- 鄭起永 外2人(1999b) 「日本語学習サイトの現状と分類」 『韓日語文論集』 第3集 韓日日語日文学会
- 鄭起永 (2000) 「マルチメディア日本語教育の理論と方法」 『2000年度学術発表大会及び釜山地域の日本語教員研修』資料集 韓日日語日文学会
- 鄭起永(2001a) 「マルチメディア日本語教材のコンテンツ評価基準」 『湘南文学』 第35号 東海大学日本文学会
- 鄭起永・趙泰永(2001b) 「インターネットを活用した日本語教育 - 学習サイト紹介を中心に - 」 『韓日語文論集』 第5集 韓日日語日文学会
- 鄭起永 外3人(2001c) 『本当にやさしい！ コンピュータ日本語』 時事日本語社